東京都遺跡調査・研究発表会
49
発　表　要　旨

令和６年３月３日

渋谷区文化総合センター大和田　伝承ホール

主　催　　東京都教育委員会
　　渋谷区

共　催　　（公財）東京都教育支援機構
　　東京都埋蔵文化財センター

【表紙口絵】野毛（のげ）14 号墳出土人物埴輪（はにわ）（六所東（ろくしょひがし）遺跡第 5 次調査）

六所東遺跡第 5 次調査地点で、墳丘が削平されており新発見となった野毛 14 号墳から出土した人物埴輪です。頭部から上半身が残存しており、頭頂部・耳朶（じだ）・耳飾（剝落痕）・腕の製作技法と、両手を胸の前に掲げる所作から、6 世紀前半に製作された埴輪であると考えられます。また、切れ長で水平に切り取られた目の表現や、「の」字状の耳飾から、埼玉地域のとくに比企（ひき）地方で製作された埴輪であると考えられます。頭や頬に赤彩が施されており、髪表現は欠落しているものの、頭頂部の調整と剝落痕から、空洞を板状髷（まげ）で塞いでいると考えられるため、女子埴輪であるとしています。

都内での人物埴輪出土例は少ないうえ、腕などの製作技法も観察できる良好な資料で、都内や多摩川流域の埴輪生産・流通体制を表す貴重な資料であるといえます。

（文：箕浦　絢）

目　　次

開会挨拶　10：00 ～ 10：05

発表１　10：05 ～ 10：35
北区　栄町（さかえちょう）貝塚　　中島一成　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

発表２　10：35 ～ 11：05
世田谷区　六所東（ろくしょひがし）遺跡　　箕浦　絢　・　寺畑滋夫　・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

発表３　11：05 ～ 11：35
小金井市　平代坂（へいだいざか）遺跡　　髙木翼郎　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

発表４　11：35 ～ 12：05
足立区　伊興（いこう）・矢下（やじった）・狭間（はざま）遺跡　　柳沼由可子　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

昼　休　み　60 分

公開講演　13：05 ～ 14：05　『縄文人骨研究の現在』　谷口康浩　・・・・・・・・・・10

休　　憩　10 分

発表５　14：15 ～ 14：45
東久留米市　川岸（かわぎし）遺跡　　岩井聖吾　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

発表６　14：45 ～ 15：15
豊島区　南池袋（みなみいけぶくろ）遺跡　　梶木理央　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

休　　憩　10 分

発表７　15：25 ～ 15：55
墨田区　墨田区№105 遺跡　　田口哲也　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16

閉会挨拶　15：55 ～ 16：00

1　北区　栄町貝塚

時代　縄文時代
遺構　焚き火址、杭、溝
遺物　土器、土製品、石器、木製品
キーワード　縄文時代中期、貝層、焚き火址

調査概要

栄町貝塚は、北区栄町５番地内、東京低地の西端に位置しており、武蔵野台地の北東端「本郷台」のの崖線にそって形成された標高３～７ｍの微高地上に立地しています。

発掘調査は令和２年（2020）３月から令和３年（2021）10 月まで実施し、整理作業を同年 11 月から令和５年（2023）１月まで行い、令和５年（2023）３月末に発掘調査報告書が刊行されました。この調査で明らかとなった成果についてご紹介します。

栄町貝塚は、出土した遺物や科学分析の結果から縄文時代中期から後期にかけて形成された貝塚であることが明らかとなりました。調査により当時の礫浜と干潟が確認され（第1図 - 4）、縄文時代の海岸近くにつくられた貝塚であることも確認されました。栄町貝塚と近い距離に所在する国指定史跡・中里貝塚とも類似した貝塚であり、海岸近くに形成された栄町貝塚と中里貝塚との関連が想定されます。

調査成果

①貝層の堆積状況（第1図 - 1～3・第3図）

地表から約1.4ｍ掘り下げた高さより貝層が検出され、もっとも厚く堆積しているところで最大 2.3m を測りました。貝層は南側から北側に向けて斜方堆積している様子が確認されました。確認された貝層はヤマトシジミ主体の層、ハマグリ主体の層、マガキ主体の破砕貝層、マガキとハマグリ・ヤマトシジミを含む混土貝層、マガキとハマグリを含むシルト質土主体の混貝土層で、貝層下部になるにつれて、シルト質土を多く含む様相が見られました。

②貝層上に広がる焚き火址（第1図 - 5）

焚き火址としたものが全部で 354 基検出されました。この焚き火址は標高約 3.5 ｍ付近で検出され、灰や炭化物、焼けた破砕貝を 10 ～ 50㎜程度と薄く堆積している点が特徴です。これらの焚き火址にはいくつかのパターンがみられ、火床に貝を意図的に敷いているものや掘り込んだ様子もなく直火で焚き火を行ったものなどが確認されています。また灰や炭化物が遺構の外側に流れているものも確認されました。これらの遺構は無数に重なり合う形で検出されました。これは、焚き火が行われた後はしばらく放置され、シルト質土で埋没したのちに、ふたたび同じ場所または近い場所で焚き火が行われた様子が伺えます。

③調査区から出土した木杭・竹杭（第1図 - 6・7）

調査区のほぼ中央付近から木杭 20 基と竹杭 19 基が検出されました。検出された木杭は砂礫層とシルト質土の境目付近に分布しています。木杭の中には先端が加工されたものもみられ、何らかの活動を目的として意図的に打ち込まれたものと思われます。

竹杭は調査区中央付近で、砂礫層下のシルト質土から４、５本を１単位としてまとめてシルト質土に打ち込まれている状況で検出されました。用途はわかりませんが、砂礫層下から検出されたことから貝層が堆積する以前に人々が何かしらの活動を行っていた痕跡と理解できそうです。

④貝塚を形成している貝類遺体（第２図）

栄町貝塚の貝種を明らかにするため、現場でサンプルを採取し、分析を行いました。その結果、栄町貝塚を構成する貝のほとんどがマガキで、その次にハマグリ、ヤマトシジミの順に多く含まれることが分かりました。

貝層ごとの貝種の変化や貝種ごとのサイズの変化は、食の嗜好の変化というよりも採取可能な季節を示しているものや、栄町貝塚を取り巻く環境に大きく関連していたものと思われます。栄町貝塚の貝類の組成は、中里貝塚と似た傾向を示すことがわかりました。一方で、武蔵野台地上の同時期の遺跡で確認された貝類の組成は、ヤマトシジミが主体であり、栄町貝塚の貝類組成と異なります。

この結果より武蔵野台地と東京低地に立地する貝塚では異なる貝類の利用があり、中里貝塚を中心とした地域における土地利用のあり方を考えていくうえで、重要な鍵となりそうです。

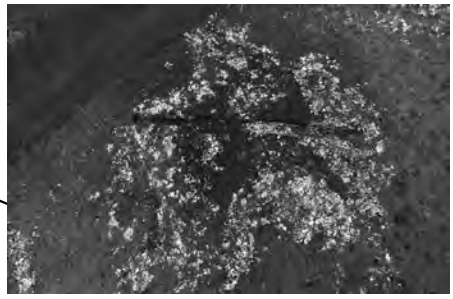
縄文時代の海岸近くに形成された貝塚

1. ハマグリの検出状況

2. ヤマトシジミの堆積状況

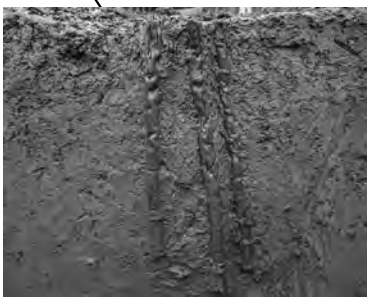
3. 破砕したマガキの堆積状況

4. 砂礫層とシルト質土層



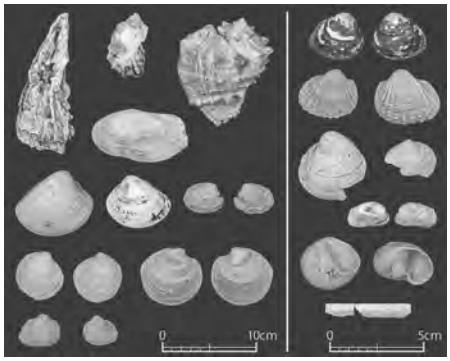
5. 検出された焚き火址（67a 号遺構）

6. 木杭半さい状況（杭４）



7. 竹杭半さい状況（杭 22 ～ 24）

第１図　調査区から検出された主な遺構



第２図　出土した大型貝類

第３図　調査区中央から北側の貝層堆積状況（オルソ画像）

2　世田谷区　六所東遺跡

時代　縄文時代、古墳時代、中世、近代

遺構　住居址、竪穴、土坑、古墳周溝、堀、溝、ピット

遺物　諸磯a・b式土器、連弧文系土器、石器、人物埴輪、円筒埴輪、須恵器

キーワード　縄文時代前期諸磯式期の集落、人物埴輪を伴う新発見の古墳周溝

調査概要

今回の調査は、六所東遺跡の5回目の本格的な調査であり、令和5年（2023）4月3日から同年6月16日まで行われました。敷地面積は2,106㎡、調査面積は365.69㎡であり、本遺跡では初めてまとまった面積を調査しました。六所東遺跡は昭和初期に諸磯式期の貝塚としてその存在が知られましたが、その後の開発により、壊滅したと考えられてきました。しかし、昭和63年（1988）に行われた第3次調査で貝層や住居址が残存していることが判明しました。

遺跡は、多摩川本流に面した舌状台地上の付け根に位置し、西側に谷が入り込んでいます。遺跡の標高は約35 m、谷よりは約15 m高くなっています。推定範囲は南北約280 m×東西約180 mで、今回の調査区は推定範囲の北西部にあたり、西側の谷に面しています。本遺跡の南側に隣接して、縄文時代中期中葉から後葉の大集落である下野毛遺跡、西側斜面には下野毛岸横穴墓群、周辺には都史跡野毛大塚古墳を最大とする野毛古墳群が存在します。

調査成果

縄文時代の遺構としては、住居址2軒、竪穴6棟、土坑15基、ピット多数が発見されました。時期が判明しているものは、7号住居址が中期後葉連弧文系期である他は全て前期後葉諸磯a～b式期です。6号住居址（第1図）は諸磯a式期の5.0 m以上×5.1 mの比較的大きな住居で、これまでに本遺跡で発見された住居址では最も大きなものです。炉址が3基あることや、柱穴の状況から、少なくとも2回建て直しています。1～6号竪穴は諸磯a～b式期です。調査部分が一部であるものが3棟、他も炉址が調査部分に無いことや柱穴の配列がはっきりしないことから、竪穴としましたが、住居址の可能性が高いでしょう。土坑・ピットは確実に伴う遺物があるものが少ないのですが、11号土坑（第2図）は上部を3号竪穴に壊されていたものの、諸磯a式の深鉢形大型破片2個体分が南西部にまとめて伏せてあり、伏甕が伴う土壙墓と考えられます。他にも土壙墓の可能性が高い土坑がいくつか発見されています。

今回までの5回の調査結果から、諸磯式期の集落が45 m以上×40 m以上の規模をもっていることが明らかになってきました。諸磯a～b式期の集落であることがよりはっきりしてくると共に、住居址や竪穴が馬蹄形または環状に並んでいるのではないかとの見通しが立ってきました。今回の調査では貝塚は発見されませんでしたが、過去の調査結果と合わせ、使われなくなった住居の凹みを利用して貝を廃棄した、諸磯a式期を中心とした小規模な地点貝塚だったのでしょう。

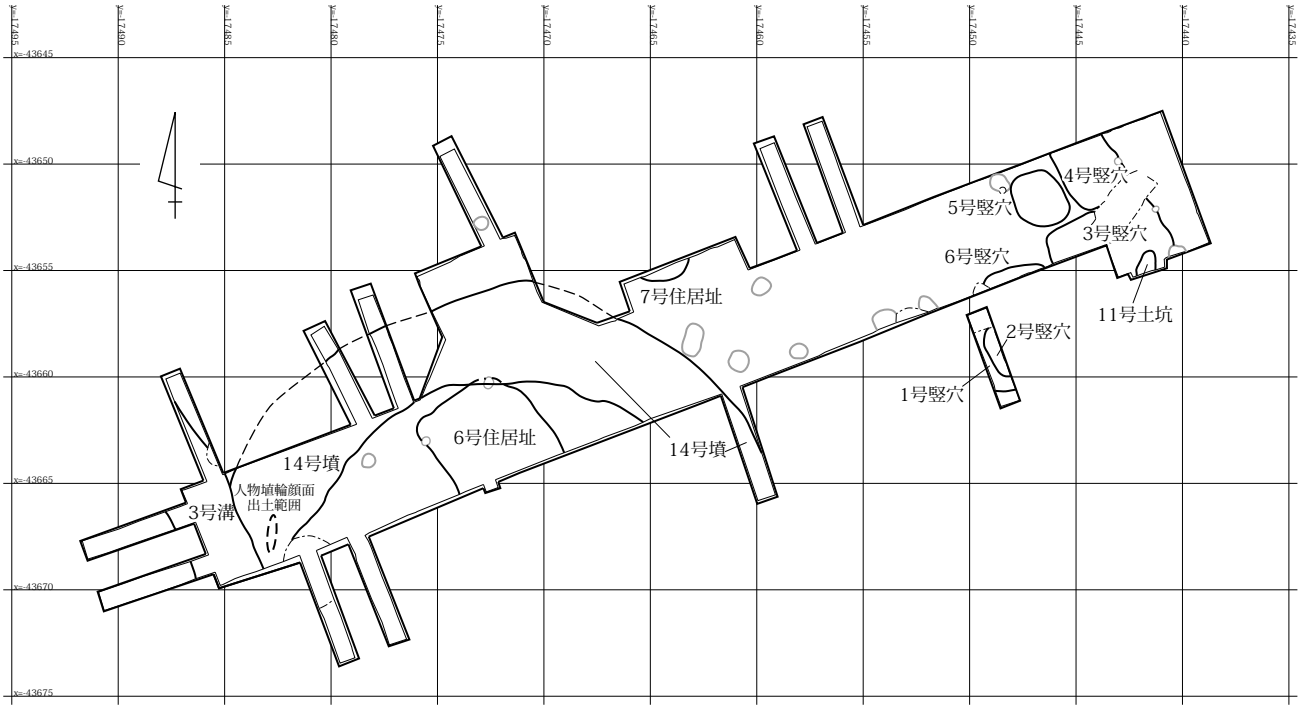
新発見の古墳周溝は、野毛14号墳と名付けられました（第4図）。今回の調査では、周溝の北側約1/4を調査しました。円墳と考えられますが、上部が過去の開発行為により削平されており、墳丘は全く残っておらず、周溝だけが残っていました。遺構確認面における推定内径22.8 m、推定外径28.8 m、周溝の上幅3.7～4.8 m、下幅2.6～3.7 m、確認面からの深さは最深0.88 mを測りますが、北西部では深さ0.40 mと浅くなっている部分がありました。基本的に内側が浅く、外側に向かって深くなっていました。

出土遺物には、円筒埴輪・人物埴輪・須恵器・縄文土器・礫がありました。これらのうち、円筒埴輪・人物埴輪・須恵器がこの古墳に伴います。埴輪は少量が周溝底面直上から出土しましたが、大部分は現存覆土最上層から出土し、内側（墳丘側）から流れ込んでいました。この覆土最上層には、墳丘が崩れ込んだと考えられる土が混じっていました。円筒埴輪は調査部分全体から出土しましたが、人物埴輪は調査部分西端から集中出土しました（第5図）。破片が多数発見されていますが、顔面・両耳・右肩・右手先などがあります。この人物埴輪は西側の谷を見下ろすように据えられていたのではないでしょうか。今のところ、野毛14号墳が造られた時期は、6世紀前半と考えています。

諸磯a～b式期の集落の形態が推定できた。人物埴輪を伴う野毛14号墳を新たに発見。

第１図　６号住居址完掘全景　南から

第２図　11 号土坑遺物出土状況　北から



第３図　調査区全体図【中世以前（ピットは除く）】

第４図　野毛 14 号墳完掘全景　南西から

第５図　野毛 14 号墳人物埴輪出土状況　南から

3　小金井市　平代坂遺跡

時代　古墳時代、奈良時代
遺構　横穴墓
遺物　須恵器甕・坏、人骨（２体）
キーワード　横穴墓、野川上流域、DNA 分析

調査概要

平代坂遺跡は野川上流域の左岸に位置し、武蔵野台地の武蔵野２面（Ｍ２面）の縁辺に立地します。令和４年（2022）に行った平代坂遺跡の発掘調査では、国分寺崖線を縦断する敷地面積 9,247㎡の内、1,860㎡の範囲が調査されて、結果、古墳・奈良時代の横穴墓が１基見つかりました。この他、旧石器時代、縄文時代、中世～近代の遺跡も確認され、多様な時代が調査されています。

調査成果

【横穴墓の調査】

小金井市においては、昭和 45 年（1970）に国分寺崖線の斜面上における下水道工事中に１基発見、緊急調査されています（登録名「前原横穴墓」）。

今回の調査で検出された横穴墓は小金井市では２例目となります。調査区内の国分寺崖線の斜面部で発見され、墓前域から玄室までがほぼ完全な状態で残されていました。玄室には、男性と女性の人骨が１体ずつ葬られていて、人骨の形態分析や年代測定、DNA 分析と多岐にわたる分析を行っています。

発見された横穴墓の規模は、墓前域が長さ 7.76 m、床面の標高は 62.0 ～ 62.3 mを測ります。横穴の入口部である羨門は、大小数多くの礫で閉塞がなされていました。閉塞石を取り除くと現れる羨道は幅 0.69 mの狭さで 1.47 mの横穴を通過し玄室に至ります。玄室は幅 2.1 m、奥行 1.89 mの方形に近い平面形態で、天井が高さ１mのドーム型を呈します。

【横穴墓から出土した人骨】

玄室内で検出された２体の人骨はともに最奥に位置し、埋葬状況は伸展葬でした。個体Ａは熟年の男性で、推定される身長は 159cm です。個体Ａの北側に位置する個体Ｂは壮年の女性で、推定される身長は 150cm です。人骨の位置関係から見れば、最初に個体Ｂの女性が埋葬され、その後、個体Ａの男性が埋葬されたものと推測されます。人骨の年代値は、Ａ・Ｂともに７世紀中頃におさまり、埋葬のタイミングに大きな隔たりはないと判断されます。

分析では、両者のミトコンドリア DNA ハプログループが異なることから、母系系統の血縁関係になく、二親等以内の血縁でないことが判明しています。さらには、縄文人的遺伝子型の個体Ａに対して、個体Ｂは渡来系のハプログループでした。両者の関係性を見ると、異母キョウダイやオジオイ、夫婦、夫婦でない非血縁等の可能性が考えられます。

【出土した遺物】

墓前域において完形に近い須恵器の甕と坏が出土しています。墓前祭祀が執り行われ、その際の供物であると考えられます。須恵器は、南比企窯産と判断でき、８世紀初頭のものと推定されます。玄室からは副葬品等の遺物は見つかっていません。

出土人骨と須恵器の年代には、時期差があります。つまり、７世紀中葉頃の埋葬行為から８世紀初頭に墓前祭祀が行われるまで、約 50 年の開きがあります。このことは、現代的な表現で言えば、遺族・子孫等による、「追善供養」の可能性が示唆されます。

【横穴墓群の可能性】

前原横穴墓から今回の横穴墓までの距離は直線で約 170 mを測ります。群で構成される横穴墓の性質上、２基の横穴墓の間ないしはその周囲には複数の未発見の横穴墓が残されていることが予測されます。今回の横穴墓の調査は、埋葬人骨の遺伝的な関係が判明したこと、野川上流域に展開する「横穴墓群」の一つである可能性が強まったこと等、今後の考古学研究に繋がる実績となりました。

横穴墓に埋葬された２体の人骨は非血縁の関係

第１図　横穴墓の位置

第２図　横穴墓墓前域　出土した須恵器

第３図　横穴墓羨門　閉塞石の検出状況

第４図　横穴墓墓前域から玄室を望む

第５図　横穴墓全景（天井除去）

第６図　横穴墓玄室　埋葬人骨（個体Ａ・Ｂ）

4　足立区　伊興・谷下・狭間遺跡

時代　縄文時代、古墳時代、奈良時代、平安時代、中世、近世

遺構　竪穴住居址、溝址、土坑、ピット

遺物　土師器、須恵器、灰釉陶器

キーワード　集落跡、須恵器大甕、灰釉陶器

調査概要

伊興・谷下・狭間遺跡（以下、「伊興遺跡」とする）は、東伊興一丁目から四丁目及び伊興本町一丁目から二丁目にまたがる範囲に所在する区内最大の遺跡です。北を大宮台地、東を下総台地、西を武蔵野台地に囲まれた東京低地の北部に位置しており、埼玉県との境をなす毛長川河岸に形成された自然堤防上に位置しています。縄文時代から近世にかけての複合遺跡として登録されていますが、集落の形成は古墳時代初頭にはじまり、特に古墳時代中期に隆盛をみる遺跡です。

伊興遺跡は明治12年（1879）に当時の南足立郡伊興村において経塚が発見されたことがきっかけとなり、考古学的に注目されるようになりました。

昭和32年（1957）に当時、國學院大學教授であった大場磐雄氏によって、初めて発掘調査が行われました。大場氏が、地元の郷土史家である西垣隆雄氏による祭祀遺物の報告に触れたことが調査の契機となりました。この調査により伊興遺跡は水に関連する祭祀が執行された祭祀遺跡として位置づけられ、その後調査が本格化していきます。昭和44年（1969）には大場氏指導の元、永峯光一氏を団長として遺跡北辺の谷下地区で調査が行われ、大量の石製模造品が出土しました。昭和48年（1973）には再び大場氏を団長として行われた調査により、古式須恵器が多数出土しています。昭和62年（1987）から平成7年（1995）にかけては伊興遺跡調査会が組織され下水道敷設工事に伴う調査が行われ、遺跡の構造がほぼ明らかとなりました。これと並行して、昭和62年（1987）年と平成4年（1992）に遺跡公園地点の調査が行われ、方形周溝墓や住居址が発見されています。そこから令和4年（2022）までに個人住宅建設等の小規模な敷地内の試掘調査が断続的に続いていましたが、今回、30年ぶりに伊興遺跡で本調査が行われました。

令和4年7月に個人住宅建設予定地に所在する埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについて照会がなされ、令和4年9月28日及び29日に、試掘調査を実施したところ、古墳時代の遺物包含層と遺構及び濃密な遺物の分布を確認しました。遺構の全容を把握するため、令和4年11月16日及び17日に試掘坑を拡張する形で確認調査を実施した結果、竪穴住居址が検出され、これにより本調査が実施される運びとなりました。

調査成果

発掘調査は令和5年2月13日から令和5年3月3日まで実施され、その結果、古墳時代前期から奈良・平安時代までの遺構・遺物が検出されました。

【古墳時代】

住居址2軒、溝址1条、土坑1基を検出しました。溝址は古墳時代前期と推定されますが、土師器甕の破片が1点出土しているのみなので、明確に断言することはできません。

住居址は中期及び後期のものがそれぞれ検出され、中期の住居址からは土師器甕・壺・埦が出土し、後期の住居址からは土師器甕・甑・坏・須恵器甕が出土しました。

包含層である黒褐色土からの出土遺物も多く、前期の遺物は土師器壺の底部が出土しており、底部には木葉痕が残っていました。この層からの出土で特に注目される遺物は須恵器大甕の破片で、15点出土しています。接続する破片はありませんでしたが、恐らく同一個体である可能性が考えられます。

【奈良・平安時代】

住居址1軒、土坑1基を検出しました。住居址は床直上から北武蔵型暗文坏と斜めの平行タタキ目が残った須恵器甕が出土しており、8世紀前半と推定されます。土坑からは9世紀前半と考えられる灰釉陶器の破片が出土しています。

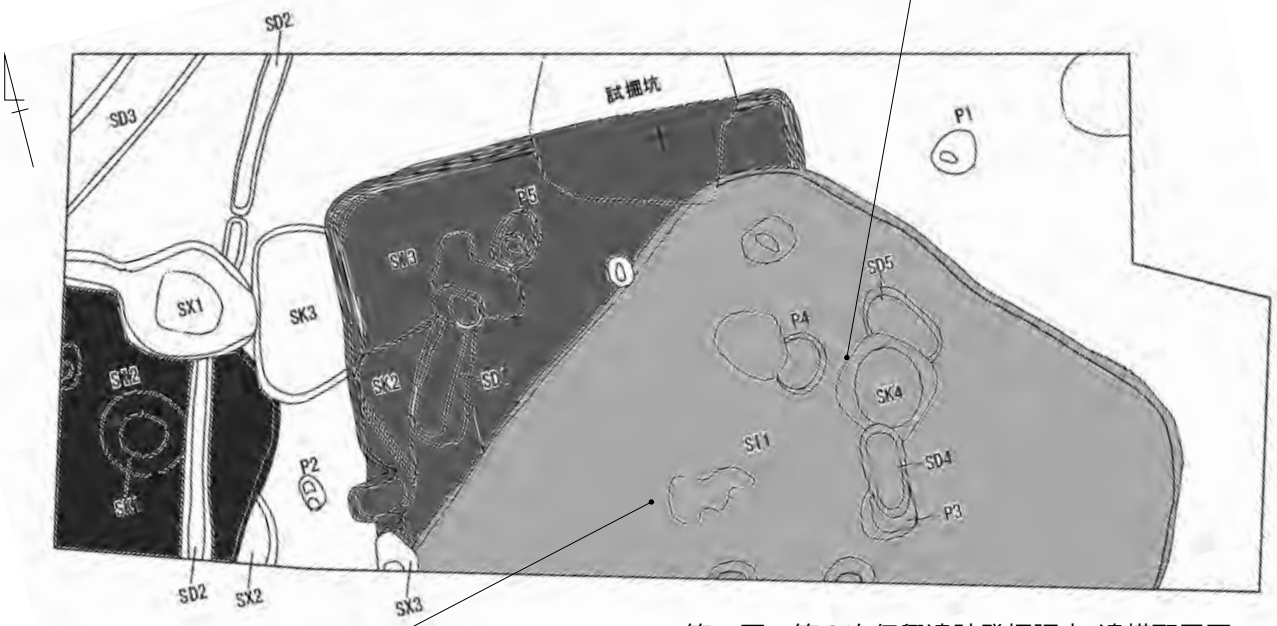
元々、今回の調査地点は、これまで下水道関連工事に伴うトレンチ調査が行われているのみで、遺構が希薄な地域として考えられていましたが、今回の調査では古墳時代ばかりでなく、奈良・平安時代の遺構の様相も捉えることができました。

分布が希薄とされていた地域での新たな集落跡の発見

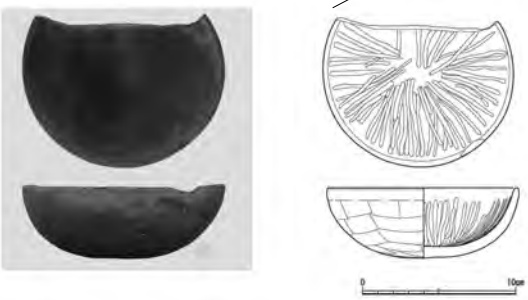
第１図　足立区の位置図

第２図　遺跡の位置図

第３図　４号土坑出土
緑釉陶器



第４図　第３次伊興遺跡発掘調査 遺構配置図



第５図　１号住居址出土　土師器坏

凡例

… 古墳時代中期の住居址

… 古墳時代後期の住居址

… 奈良時代の住居址

第６図　遺構出土遺物

第７図　遺構外出土遺物

『縄文人骨研究の現在』

谷口康浩

1．埋葬人骨に内在する情報

遺跡から出土する人骨は、文化財保護法でも位置づけが曖昧ですが、考古学的にも人類学的にも多くの有益な情報を内在させた貴重な研究対象です。

遺跡出土の古人骨の保存状態は土層の性状や堆積環境に大きく左右されます。北ヨーロッパでは泥炭層中から皮膚や筋肉などの軟部組織が残った状態で遺体が見つかる場合がありますが（bog man）、日本ではこうした出土例はありません。日本の土壌は概して酸性傾向で有機物が残りにくいためですが、灰層が堆積した洞窟・岩陰や炭酸カルシウムの豊富な貝塚では、人骨が比較的保存されやすい環境となっています。保存状態のよい人骨が得られれば、以下のような多くの情報を得ることが期待できます。

a）個人情報

性別、年齢、形質（顔だち・体つき・身長など）、出生地、ＤＮＡ・遺伝型、血液型など

b）生活状態

食性・栄養状態・離乳時期、疾患・骨折・虫歯・出産経験、筋力・労働などの生活状態、日常的・習慣的姿勢など

c）社会と文化

血縁関係、家族・親族組織、社会的地位・身分の差異、男女の差異（ジェンダー）、埋葬様式･葬制、身体加工習俗（抜歯、歯牙加工）、殺傷痕など

2．東京都内出土の縄文人骨

東京都内で出土した縄文時代の人骨は、膨大な数の江戸時代人骨に比べれば少ないものの、東京湾に近い都心部の貝塚遺跡を中心に出土例が徐々に増加しています。最近 25 年の主な出土例では、渋谷区豊沢貝塚第 2 地点、文京区真砂町遺跡第 5 地点、北区西ヶ原貝塚、新宿区市谷加賀町二丁目遺跡で、中期・後期の人骨が出土しています。

3．人骨のタフォノミーと埋葬環境

人骨の出土状況は、遺体の取り扱いや埋葬法などを知る重要な手がかりとなるため、発掘現場での注意深い観察が必要です。その際に注意しなければならないのはタフォノミーの検討です。人骨の出土状態や埋没状況はさまざまな人為的・自然的作用を経て形成されたものであり、それらを時間的経過に沿って把握する必要があります。

タフォノミーとは元々、化石の生成過程を研究する古生物学の分野でしたが、考古学でも過去の人々の活動痕跡である考古資料の産状と由来、形成過程を研究する基礎分野となっています。人骨のタフォノミー研究では、埋葬時の状況、遺体の置かれた環境に関する観察・検討がまず必要です。人類学の奈良貴史氏は、出土した骨が本来の解剖学的な位置関係を保っているかどうかを観察することで、遺体を土中に直接埋めたのか、棺などに納められた遺体が白骨化する間に周囲に空間があったのかを区別できることを示しました。「充填環境」と「空隙環境」の識別です。考古学者の青野友哉氏や渡辺新氏は、こうした視点から人骨出土状況を仔細に検討して、縄文時代の埋葬行為や埋葬環境の復元に取り組んでいます。

骨自体に残されたさまざまな痕跡の観察も重要です。死因に関わる殺傷痕や、筋肉などの解体を示すカットマーク、骨表面の風化、動物などによる咬み痕などから、遺体の取り扱いや埋葬後の状況に関する情報をつかむことができます。

タフォノミー研究の実践によって、縄文時代の埋葬法も遺体を土中に埋める土葬(直葬）だけではなく、より複雑な埋葬習俗があったことがはっきりしてきました。ここでは筆者が行っている群馬県居家以岩陰遺跡の縄文時代早期の事例を紹介します。

居家以岩陰遺跡では、これまでに縄文時代早期の人骨が 40 個体以上出土していますが、腰の位置で上半身と下半身が分離された個体が多数含まれています。上半身と下半身の骨は、それぞれ解剖学的位置関係を保った状態で出土していますが、腰椎の途中で骨の交連が分離された状態を示しています。分離された部位の腰椎に大きな欠損は見られないことから考えると、切断される前の遺体は乾燥してミ

イラ化していた可能性が高いと思われます。つまり、死者の遺体をすぐに埋葬せず、ある方法によって乾燥させ保存していた可能性が考えられるわけです。縄文人の葬制と死生観を知る新たな知見です。

4．進歩する骨考古学

出土人骨を含めた古人骨の骨学的研究を「骨考古学」と呼びます。日本人類学会の中に骨考古学分科会ができたように、日本でもこの分野の研究が急速に進展しており、新たな分析手法の開発とともに、さまざまな研究が進められています。縄文人骨の骨考古学研究からも、興味深い事実が次々と明らかにされている現状です。

現在、骨考古学で扱われているトピックはさまざまです。①骨疾患や齲歯・歯周病などからみた健康状態の古病理学的検討、②骨の形態変異・骨折・歯牙咬耗などにみる労働や生活習慣、③個人の一生・生活史（第2大臼歯エナメル質 Sr 同位体分析による出身地推定、妊娠出産痕など）、④殺傷痕・防御骨折・事故死など死因に関わる法医学的検討、⑤コラーゲンの同位体分析や歯石の DNA 分析による食生活の復元、⑥ DNA 分析による遺伝学的系統と多様性、個体間の血縁関係、遺伝的体質などの検討、⑦平均寿命やゲノム解析による人口動態推計、などが現在の主な関心です。埋葬様式や抜歯などの文化的行為も、骨考古学的に研究されています。再び、居家以岩陰遺跡の縄文早期人骨の研究から、ミトコンドリア DNA 分析による個体間血縁関係の研究成果を紹介します。

ヒトの DNA 分析には、細胞核の染色体を対象とした核 DNA 分析と、細胞内小器官のミトコンドリアを対象としたミトコンドリア DNA（mtDNA）分析があります。約 30 億の塩基からなる核 DNA に対して mtDNA は 16569 塩基と比較的短く、かつ細胞内に多量に存在するため、人骨の保存状態がよければ4種類の塩基の配列を高い精度で復元することが可能です。実際、居家以人骨の研究でも、DNA チームが開発した実験手法により、mtDNA の全長塩基配列を決定することに成功しています。

mtDNA は母親から子に受け継がれる遺伝子であり、母系の血縁関係や系統しか明らかにできません。しかし、全世界の現代人の膨大な遺伝情報が参照できるため、縄文人の遺伝学的系統や多様性・地域性を探るには最も適した方法です。また、特定集団内の個体間の血縁関係や遺伝学的多様度を明らかにできるので、先史時代の社会組織や婚姻制度の復元に役立ちます。

水野文月氏・植田信太郎氏のチームが行った居家以人骨の DNA 分析では、現在までに 20 個体の mtDNA の全長塩基配列を解読しました。その結果、① N9b と M7a の二つのハプログループが含まれること、② N9b グループの中に同じハプロタイプの母系血縁親族が多数含まれること、③ N9b・M7a グループのいずれにも数塩基程度の配列が異なる多様なハプロタイプが含まれることなどの事実が明らかとなりました。縄文早期の特定集団の遺伝学的特徴・系統と集団内の多様性を捉えた画期的な研究成果であり、初期の縄文社会が母系的な血縁集団であったことを示しています。

5．出土人骨を扱う考古学者の役割

出土した人骨そのものの医学・解剖学・骨学的な分析は、人骨研究の専門家である人類学者の手に委ねられますが、人骨を発掘する現場段階での初動調査が実はたいへん重要です。その役割を担う考古学者にも、人骨の基礎知識とともに適切な調査法の習熟が求められます。発掘段階から人類学の専門家と協力して進めることが理想的で、居家以人骨の発掘も東京大学の近藤修氏と共同で進めています。

考古学者の視点は、これまでは主に埋葬姿勢（屈葬・伸展葬など）や埋葬法（単葬・再葬）、あるいは遺体を収めた埋葬遺構（土坑・石棺・土器棺など）や副葬品などに向けられていました。しかし、すでに述べたようにこれからの人骨調査では、骨の出土状態を現場で詳しく観察・記録する知識とスキルが必要です。それを記載する発掘調査報告書の一次資料としての質も課題となり、出土状態を再現できる三次元計測も必須となります。また、ＤＮＡ分析や同位体分析では、現代人の汗・皮脂・唾液などやカビなどの菌類による試料汚染（コンタミネーション）が問題となるため、発掘現場から室内での整理・保管まで人骨の取り扱いには細心の注意が必要です。

文系出身の考古学者にはなかなか難しい課題ばかりですが、発掘調査は一度限りのものであり、掘り出された人骨から最大限の情報を読み取る努力は、遺骨を扱う私たちの責務といえましょう。

5　東久留米市　川岸遺跡

時代　旧石器時代、縄文時代、中世～近世

遺構　掘立柱建物跡、柱穴列、溝状遺構、井戸跡、地下式坑、地下室、土坑

遺物　磁器、陶器、土器、土製品、石製品、金属製品、銭貨、動物骨、人骨

キーワード　小野久内吉次（おのくないよしつぐ）、鷹匠屋敷

調査概要

遺跡は、東久留米市浅間町２丁目地内、落合川と黒目川の合流点右岸に形成された高台の上に所在します。第Ⅰ期発掘調査は令和元年（2019）８月から令和３年（2021）６月まで実施し、旧石器時代の環状ブロック群や、縄文時代前期の土坑群を伴う集落跡の検出など、重要な成果を得ることができました。また、中世から近世では、建物跡をはじめとする多数の遺構が遺物と共に検出され、16 世紀から 17 世紀代を中心としてこの地に広大な屋敷が所在したことが判明しました。令和６年度の正式報告に向けて現在も整理作業と第Ⅱ期発掘調査を実施中ですが、今回の発表では第Ⅰ期発掘調査で明らかとなった中世から近世にかけての調査成果の一部を紹介します。

中世から近世にかけては、掘立柱建物跡 16 棟、柱穴列 19 列、溝状遺構 44 条、井戸跡 10 基、地下式坑 16 基、地下室（ちかむろ） 12 基、土坑 155 基、土坑墓 1 基、小穴 1,522 基などが検出されました。当該期の遺構は調査範囲全域に分布していましたが、より居住や生活に密接に関わる建物跡や井戸跡などの遺構は、調査区南半部の一定区域内に集中することがわかりました。この区域内では、掘立柱建物は北西部と南東部の２箇所に分けて建てられ、井戸の多くは建物のすぐ脇に配されています。また、建物が建てられた範囲の外周部には、地下（半地下）空間を伴う地下式坑や地下室、雑多なゴミを廃棄するための土坑などが設けられていたようです（第1図）。

掘立柱建物跡には様々な規模のものが検出されましたが、建物の軸方位にいくつかのパターンが認められるのが興味深い点です。軸方位が異なる掘立柱建物跡が、同じ地点で重なるように検出されたことから何度かの大がかりな建て替えが行われた可能性が指摘できます。火を受けた痕跡がある陶磁器（第２図）が周囲にある様々な遺構から出土したことも、建物の建て替えが行われた理由と関係があるのかもしれません。

地下式坑や地下室の多くは使用されなくなった後に埋め戻されていましたが、中には使用時の状況を示唆するかのように、室部底面から動物骨や炭化した穀物、刀に装着する金具（第３図）、鉄鏃（てつぞく）（第４図）などの遺物が検出されるものがありました。また、大型の廃棄土坑からは数十枚のカワラケがまとめて捨てられた状態で検出され、さらにこの土坑の覆土には貝殻や炭化種実が含まれていることもわかりました。これらは、武家社会に見られる饗宴（きょうえん）や献杯（けんぱい）などの儀礼痕跡とも考えられます（第1図1）。その他、獣骨埋納土坑（第1図３）や土坑墓（第1図６）などが、掘立柱建物跡が集中する区域から離れた地点から発見されています。屋敷地を囲うように配された溝状遺構（第1図７）も、屋敷の防御性を高めるために機能していた可能性があります。

出土遺物は磁器・陶器・土器が中心で、これに加え砥石や石臼、板碑（いたび）等の石製品、銭貨、金属製品などが出土しました。特に 16 世紀後半から 17 世紀前半の遺物には、在地の土器、瀬戸・美濃産や肥前産の陶器に加え、当時においては稀少性が高かった中国産の陶磁器がまとまりをもって出土している点が特徴的です。

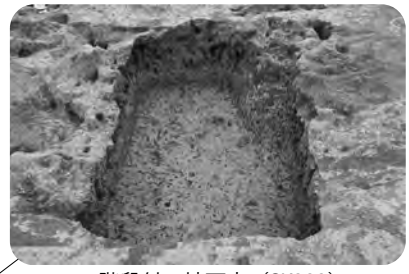
遺跡周辺はかつて「小野殿淵」や「屋敷跡」と呼ばれており、地域伝承や文献史料から徳川秀忠・家光の頃の鷹匠頭を務めた小野久内吉次の屋敷跡推定地と考えられてきました。17 世紀中頃に作成された『武蔵田園簿』にも、遺跡一帯を含む落合村は小野久内の知行地（ちぎょうち）と記されています。発掘調査では遺構と小野家の直接的な関係性を示す資料を検出することはできませんでしたが、①遺物の年代が小野家落合村を領地としていた年代幅におさまること、②稀少性が高い中国産の陶磁器が多く出土したこと、③多数の掘立柱建物跡とこれに付随する施設が広範囲で検出されたこと、④武家社会における儀礼痕跡と推定される遺物出土状況が確認されたことなどから、調査で検出された屋敷跡が小野家屋敷に関連するものであった可能性は高いと言えるでしょう。

清流が落ち合う村の鷹匠屋敷

1. カワラケ廃棄土坑（SK261）

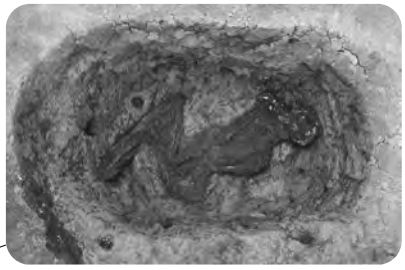
2. 大型の地下室（SK040）

3. 獣骨（イノシシ）埋納土坑（SK376）



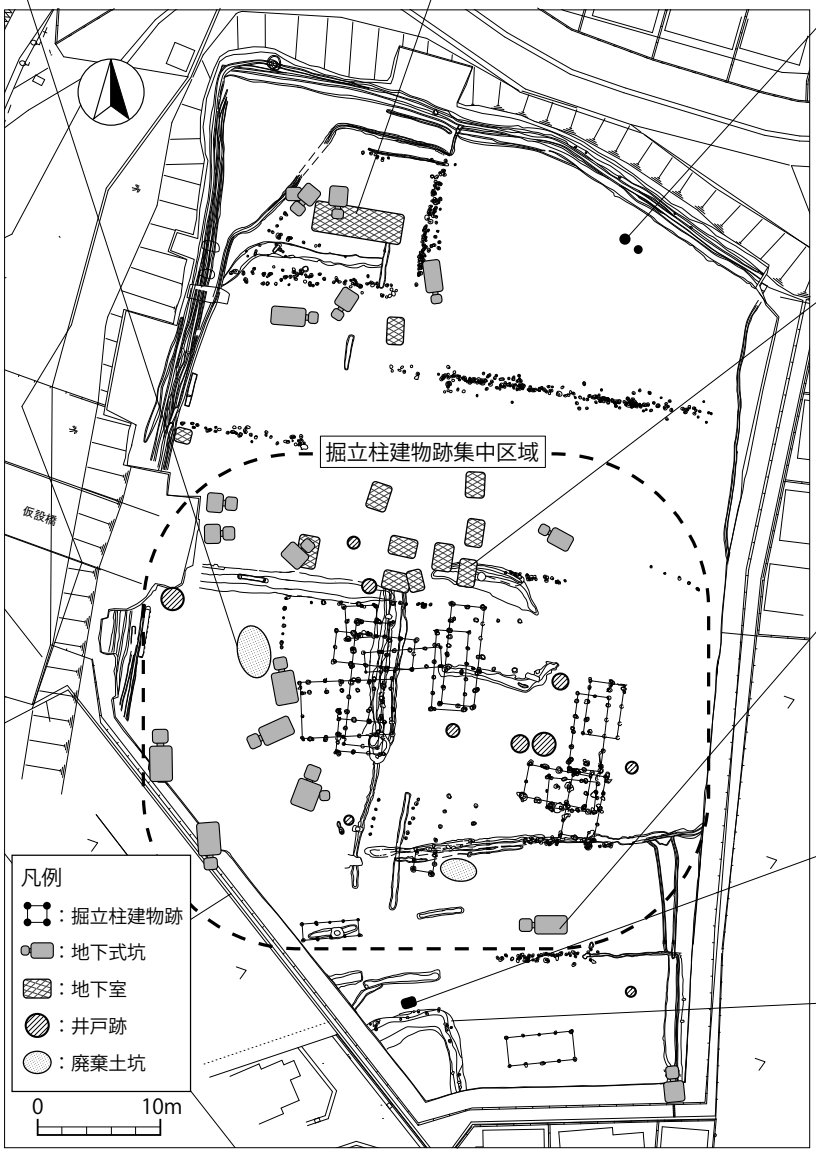
4. 階段付の地下室（SK323）

5. 地下式坑（SK214）



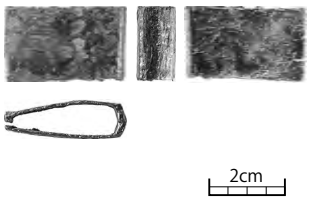
6. 土坑墓（SK152）

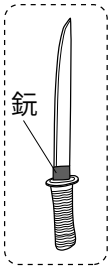
7. 直角に曲がる溝状遺構（SD009）



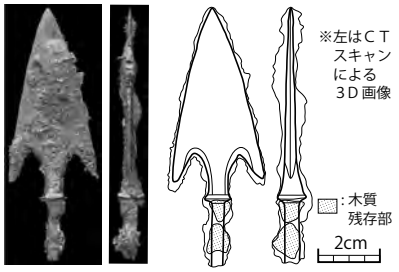
第１図　中世～近世の主な検出遺構

第２図　被熱した陶磁器





第３図　地下室出土の鈂（はばき）



第４図　地下式坑出土の鉄鏃

6　豊島区　南池袋遺跡

時代　縄文、近世、明治、大正、昭和

遺構　陥(おと)し穴、畝跡、生垣痕、井戸、煉瓦基礎建物、地下室、排水施設

遺物　縄文土器、陶磁器、土器、ガラス乾板、磁器やガラス製の現像器具、フィルム

キーワード　東洋乾板　ガラス乾板　近代産業

調査概要

【調査について】

南池袋(みなみいけぶくろ)遺跡は豊島区南池袋二丁目周辺に位置する江戸時代を中心とした遺跡です。今回の調査地点は豊島区役所の東側にあたります。調査は、市街地の再開発事業に先立って令和３年（2021）８月から令和５年（2023）３月まで行いました。

調査の結果、縄文時代と江戸時代～昭和時代までの遺構・遺物が発見されましたが、とりわけ日本の写真産業の先駆けとされる「東洋乾板株式会社」（以下、東洋乾板と略す）に関する発見は、町工場の集積地であった池袋を象徴する貴重な発見となりました。

【東洋乾板前史～近世の雑司谷村～】

近世の雑司谷村の様子が窺える「武州豊島郡雑司谷村絵図」では、本遺跡の周辺域には農民が生活しており、付近には畠(はたけ)が存在したことがわかります。

今回の調査でも、農民が生活していたと思われる範囲には建物の跡と思われる掘立柱建物の柱穴や井戸、その範囲を区画するようにいくつもの生垣や大規模な畠の耕作の跡も発見されました。

【東洋乾板とガラス乾板】

フィルムが開発される以前、撮影した写真を感光するためには板ガラスに写真乳剤を塗布したものが用いられていました。中でも写真乳剤を乾燥させた「ガラス乾板」は製造が難しかったと言われています。

東洋乾板は写真技師の高橋慎二郎が設立した会社で、大正８年（1919）に雑司ヶ谷で操業を開始しました。国産ガラス乾板を先駆けて製造した会社として近代日本の写真産業を支えました。

昭和９年 (1934) には富士写真フイルム株式会社に吸収合併され、同社の雑司ヶ谷工場として操業しましたが、昭和 22 年 (1947) に工場は閉鎖されました。

【発見された東洋乾板の遺構・遺物】

東洋乾板に関連する遺構・遺物は本地区南西側の調査区で発見されました。

最も注目されるのは煉瓦造やコンクリート造の建物基礎です。これらを写真・絵図・地図資料と比較すると建物の用途が推定できることがわかりました。例えば煉瓦造の建物基礎は「新写真科学研究所」と呼ばれる昭和２年（1927）に竣工した建物と判明しました。

敷地全体には土管が張り巡らされていました。ガラス乾板の製造の際に、乾板を洗浄する作業などに利用した大量の水を排水するために用いられたと考えられます。

また、「新写真科学研究所」をとり囲むように、大型の地下室が複数基検出されました。構築された目的は不明ですが、遺構の中からは多量の遺物が出土しました。大半を占めるのは、大量のガラス乾板や現像器具と思われるガラス製品・磁器製品で、研究所内部で使用されていたものと考えられます。そのほかインク瓶や飲料瓶などのガラス瓶や歯ブラシ、革靴やスリッパなど工場内部で用いられていたと考えられる生活感のある遺物も出土しています。遺物の年代は、富士写真フイルム合併前後の 1930 年代頃と考えられます。

また、富士写真フイルムに関連する遺物も出土しました。ロールフィルムの破片や軸などがいくつも確認されました。

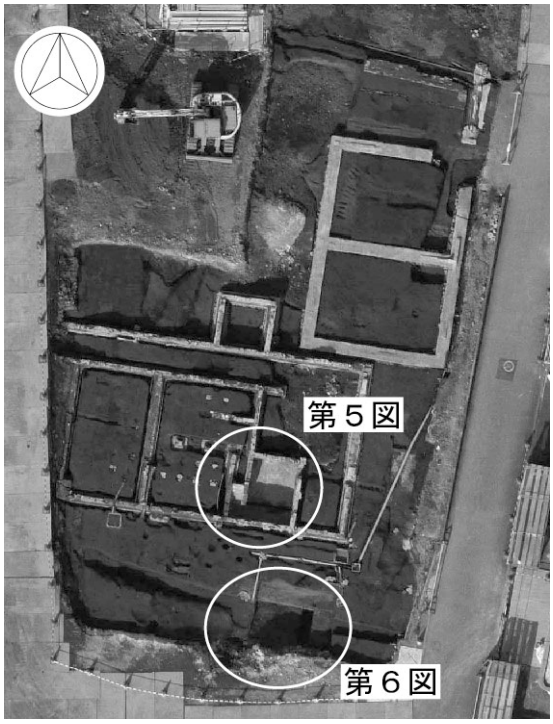
東洋乾板の周辺に目を向けると、宅地が広がっていたことが地図資料で分かります。これを支持するように今回の調査でも礎石建物や土管列などの生活空間であったことを示す遺構が発見されています。東洋乾板が設立されるまでのこの地は民家がほとんど存在しない地域でしたが、工場が創業したことにより、周辺域の開発が進んだ様子を窺うことができました。

【今後の課題】

現在整理作業を行っており、具体的な検討はこれから進める予定です。東洋乾板敷地内の遺構の用途に関する検討や地下室から出土した多量の遺物の分析を行います。一方で、東京都内で江戸時代の農村部に関する広範囲な調査事例は少なく、貴重な成果です。江戸近郊における農村の生活の様子、そしてその後の東洋乾板設立による雑司ヶ谷地域の近代化の様子を具体的に明らかにすることが課題です。

江戸の農村から写真産業の発信地へ変貌する遺跡

第１図　遺跡の位置
（破線は東洋乾板の推定範囲）



第３図　東洋乾板に関する遺構が発見された調査区

第６図　ローム（赤土）を掘りこんで作られた
地下室

第２図　東洋乾板俯瞰図　1929（昭和４）ごろ
出典：豊島区郷土資料館 1994『町工場の履歴書』

第４図　調査区全景（奥が煉瓦造の建物基礎）

第５図　煉瓦造の建物基礎の中の地下室

第７図　地下室から出土したガラス乾板
と現像器具（第６図の白丸を拡大）

7　墨田区　墨田区№105 遺跡

時代　近世、近代

遺構　建物跡、井戸跡、木樋、竹樋等

遺物　陶磁器、木製品、レンガ、ガラス製品、金属製品等

キーワード　本所地域、柳島横川町、近代工場跡

調査概要

墨田区№105 遺跡は墨田区東端、江東区との区境に南北に流れる横十間川西岸沿いに位置しています。墨田区はおおむねスカイツリーから北側の向島地域は古代から中世には人々が定着し、近世には農村地帯となっていきます。一方、南側の本所地域は近世に入っても低湿地帯のままで人々が住むには適しておらず、微高地であった隅田川東岸を除き 17 世紀後半以降の「本所開発」と呼ばれる大規模開発開始まで土地利用は進みませんでした。ただ、№105 遺跡がある本所地域東部は「本所開発」から時間が経過した幕末段階でも屋敷地と百姓地が混在しており都市化は遅れていました。近代に入るとそのような土地が工場用地となっていきます。

遺跡を含む周辺の近世の土地利用の変遷は、現時点で判明している限りで『本所絵図』(明和 5 年 (1768) ～安永 5 年 (1776)) では柳島横川町及び柳島村に位置し、以下、『北本所横川ヨリ亀戸迄』(天保 11 年 (1840)) には柳島横川町屋と柳島村、『嘉永新鐫本所絵図』(嘉永 5 年 (1852)) では旗本斎藤内蔵頭屋敷地及び横川町とあります。なお、18 世紀代後半の絵図には抱屋敷と記載されているものもあることから、抱屋敷の一部は柳島村内に成立した百姓町屋である柳島横川町を抱屋敷とした「町並抱屋敷」であった可能性も考えられます。

近代に入ると、人が住んでいない広大な土地があり、かつ物資の水上運搬に適していた横十間沿いに工場が相次いで操業するようになります。遺跡周辺も工場用地となり、『明治四十年一月調査東京市本所区全図』(明治 40 年 (1907)) には泉染物工場、その後は日新染布株式会社の工場となったと考えられます。

調査は令和 4 年 (2022) 8 月から翌令和 5 年 6 月まで行われました。その結果、近世から近代にかけての町屋跡と工場跡が発見されました。遺跡の変遷は大きく工場期以前と工場期に分かれ、さらに工場期は時期によって規模や構造が変化していくことが判明しました。

【工場期以前】　遺跡北西側 (Ⅰ・Ⅲ区) では大型の土留と下水溝の他、池の護岸の可能性がある土留などが確認されています。一方、南東側 (Ⅱ区東側) では木樋や竹樋の他、井戸、埋桶、胞衣皿、池の護岸の可能性がある土留などが検出されています。このうち南東側の遺構群は柳島横川町に関連すると考えられます。年代は陶磁器などの出土遺物から 18 世紀後葉～ 19 世紀第 3 四半期 (明治初頭) 頃と幅広いことからさらに土地利用の変遷が複数期に細分される可能性もあります。

【工場期】　今のところ、工場は少なくとも「創業期」「拡張期」「復興期」の 3 期にわたって増改築を繰り返していることが判明しています。

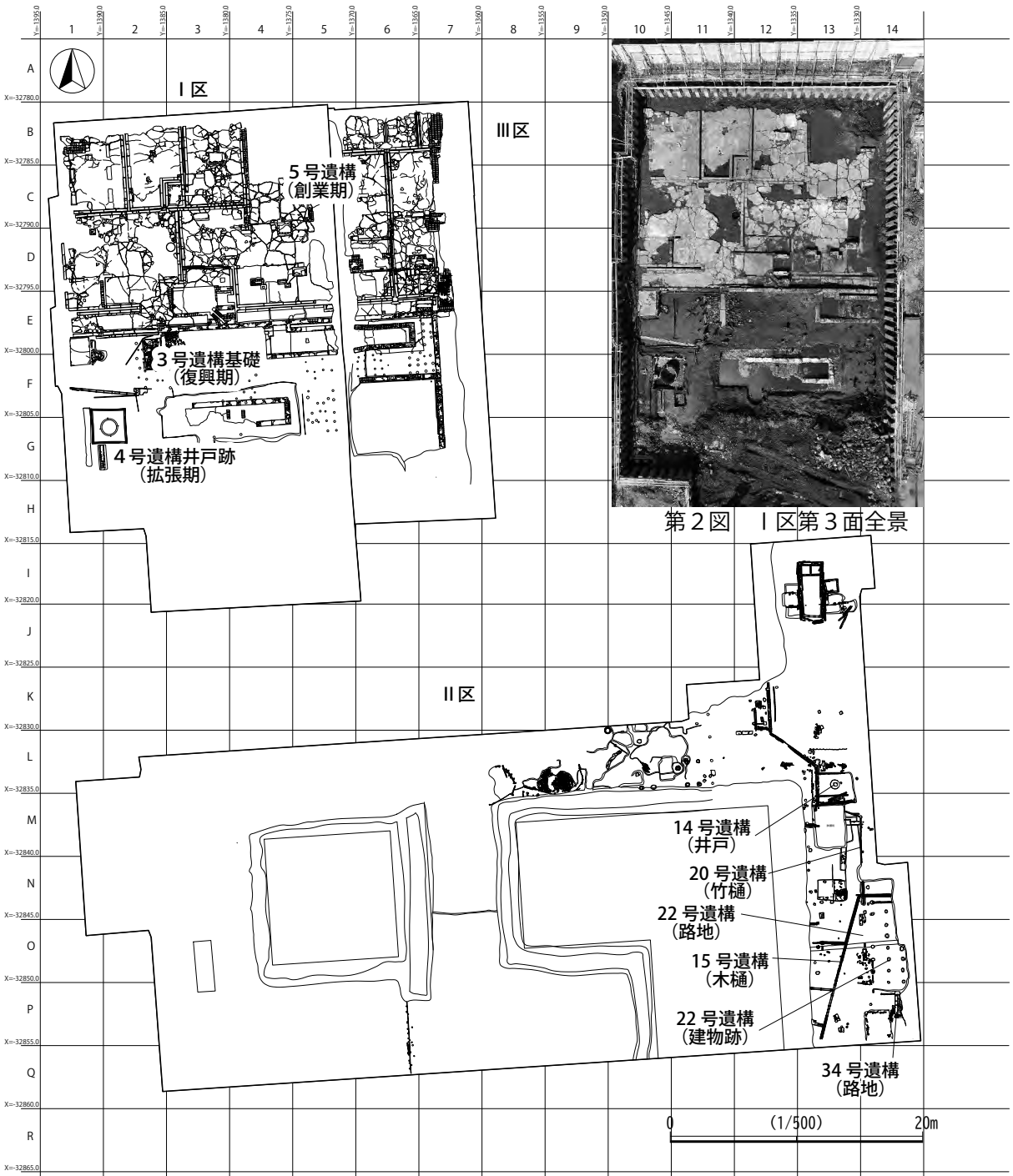
創業期　レンガ積基礎やモルタル床の工場建物が建設される遺跡北西側 (Ⅰ・Ⅲ区) と建物跡や木樋・竹樋、井戸などが密集し前代から引き続き町屋であったⅡ区で大きく土地利用が異なる時期です。年代は 19 世紀第 3 四半期～第 4 四半期頃と考えられます。

拡張期　工場の規模がⅠ・Ⅲ区南側へ拡張される時期で、創業期の工場基礎の上に新たな工場を建設します。工場床はレンガ敷となり、コンクリート製の溝や枡、大型井戸などが構築されています。また、Ⅱ区東側の町屋は消えて、近世からの土地利用の連続性がなくなります。年代は 20 世紀第 1 四半期頃で、大正 12 年 (1923) 9 月 1 日に発生した関東大震災の影響と思われるひび割れや歪みが煉瓦敷の床に確認できます。

復興期　震災後に工場をさらに拡大する時期で、拡張期の工場基礎の上にさらに新しい工場を建設しています。工場はコンクリート土間とレンガ基礎で構築されており、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区の調査区全域に広がっています。レンガ基礎下には大形の松杭を打ち込んでいる箇所があることから建物本体は重量があったようです。年代は震災以降と考えられます。

大きな成果として、近世から近代にかけて村落及び町屋 (町並抱屋敷) が工場へと土地利用が変化していく様子が明らかになった点が挙げられます。また、時期によって工場の規模や構造が異なる点が判明した点も成果として挙げられます。

近世町屋から近代工場への土地利用と工場の構造の変遷が明らかとなった



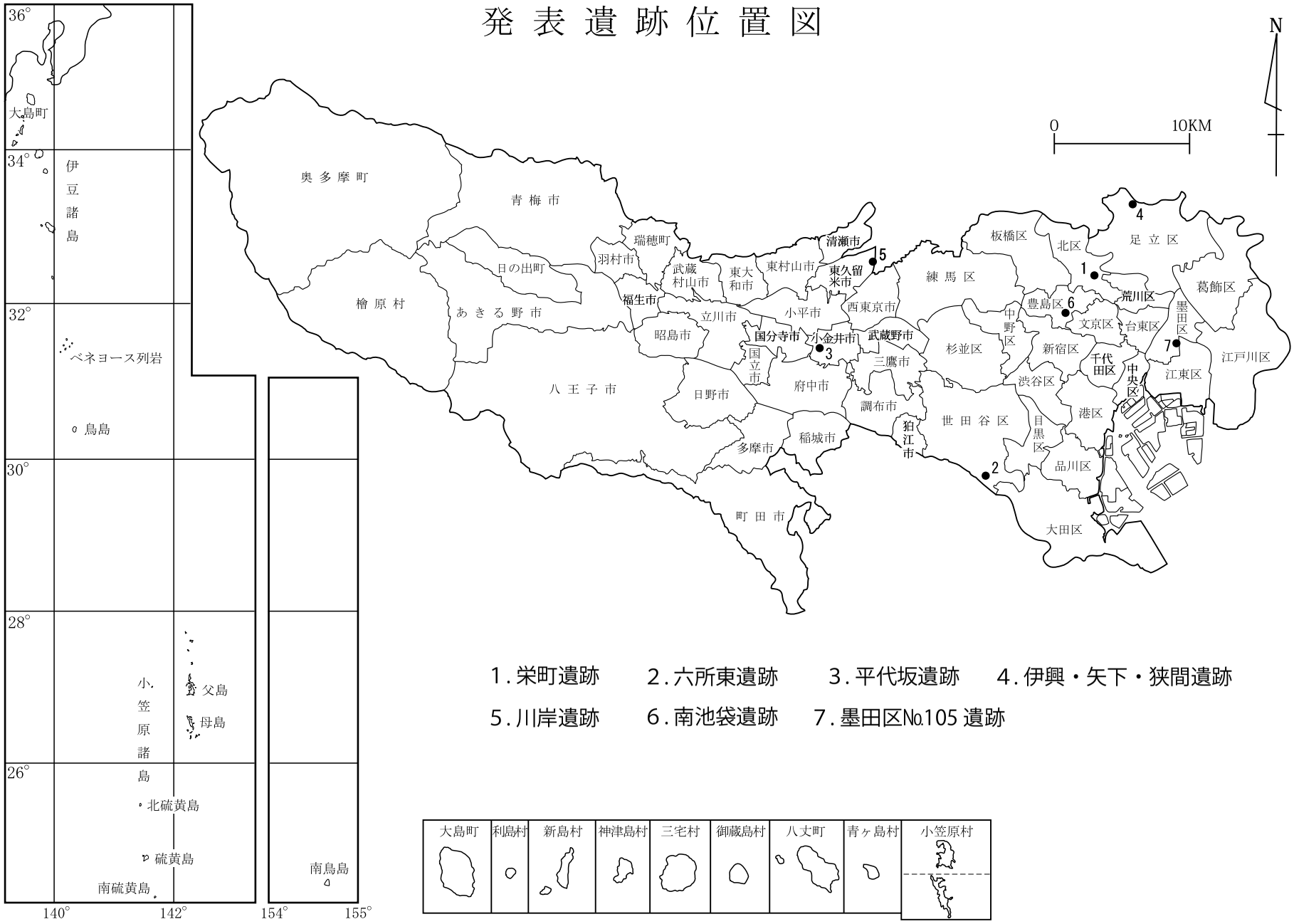
第２図　Ⅰ区第３面全景

第１図　遺構第３面全体図(創業期　19世紀第３四半期～第４四半期頃)

第３図　Ⅱ区第３面東側全景

第４図　Ⅱ区出土磁器

発表遺跡位置図



1. 栄町遺跡　2. 六所東遺跡　3. 平代坂遺跡　4. 伊興・矢下・狭間遺跡

5. 川岸遺跡　6. 南池袋遺跡　7. 墨田区No.105 遺跡

【要旨執筆者一覧】

発表１	中島一成（東京都埋蔵文化財センター）
発表２	箕浦　絢（世田谷区教育委員会）
発表３	髙木翼郎（小金井市教育委員会）
発表４	柳沼由可子（足立区地域のちから推進部）
公開講演	谷口康浩（國學院大學教授）
発表５	岩井聖吾（東京都埋蔵文化財センター）
発表６	梶木理央（特定非営利活動法人としま遺跡調査会）
発表７	田口哲也（墨田区教育委員会）

東京都遺跡調査・研究発表会 49 発表要旨
令和６年３月３日発行

東京都教育委員会印刷物登録令和５年度第 65 号

編　集　東京都教育委員会
（公財）東京都教育支援機構
東京都埋蔵文化財センター
発　行　東京都教育委員会
印　刷　（株）まこと印刷